

17. 看護師の情動知能に関する研究

—看護基礎教育別での検討—

白井佑季（横浜市立市民病院）、山口大輔、上原文恵、小林千世、松永保子（信州大学医学部保健学科）

キーワード：情動知能、看護基礎教育課程、経験年数

要旨：本研究は、病院における看護師の情動知能と看護基礎教育課程との関連を明らかにし、今後の患者への質の高い看護実践や、よりよい看護基礎教育をするための一助とすることを目的とした。看護師 736 名に、豊田らが開発した日本版情緒的スキルとコンピテンス質問紙（ESCQ）を用いて調査し、467 通を分析対象とした。分析の結果、看護基礎教育課程別で全体の得点について有意差が見られ、3 年制短期大学が 4 年制大学や 3 年看護専門学校よりも有意に高かった。下位尺度別では、「情緒の表現と命名」について 3 年制短期大学が 4 年制大学や 3 年制看護専門学校よりも有意に高く、「情緒の制御と調整」についても 3 年制短期大学が 4 年制大学よりも有意に高かった。このことから、3 年制短期大学卒業の看護師は、長年、同僚やコ・メディカルとともに働きながら、自分自身で看護ケアのフィードバックを行い、自己の思考や感情を表現、コントロールしながら看護を実施してきたことで、情動知能が高まったのではないかと考えられた。

A. 目的

能力を測る指標として知能指数があるが、人生をより豊かにする指標として、情動知能がある。ゴールマン¹⁾は、情動知能とは、「他人の気持ちを感じ取る共感能力、集団の中で調和を保ち、協力し合う社会的能力であり、先天的な要素が少なく教育や学習を通して改善・習得されるものである。」と述べている。また、井村ら²⁾は、「情動知能の高い看護師は、患者の感情を理解した上で、患者の状況に応じたケアを提供できる。」と述べている。したがって、質の高い看護実践を実施するためには、看護師の情動知能を高めることが重要であり、そのような教育が必要不可欠となる。今回、より質の高い看護実践のために、看護師の看護基礎教育の違いによる情動知能の差異を明らかにした。

B. 方法

1. 調査対象者：S 大学医学部附属病院における看護師 736 名。
2. 調査期間：平成 28 年 9 月～10 月。
3. 調査内容：性別、年代、看護師経験年数、勤務部署、看護基礎教育における最終学歴などの基本的属性と、豊田³⁾ら（2005）が開発した日本版情緒的スキルとコンピテンス質問紙（以下、ESCQ とする）を用いた。ESCQ は、「情緒の認識と理解」「情緒の表現と命名」「情緒の制御と調節」の 3 要素の計 28 項目から成り、信頼性・妥当性が検証されている。評価は、「5：いつもそうである」「4：だいたいそうである」「3：時々そうである」「2：めったにそうでない」「1：決してそうでない」、の 5 件法である。
4. データの収集方法

S 大学医学部附属病院の看護部長に研究を依頼し、許可を得た。その後、各病棟へ人数分の研究参加依

頼文書と調査用紙を持参した。各病棟師長には研究の主旨を説明し、調査対象者への調査用紙の配布、調査用紙記入後に小袋に入れて厳封することの説明を依頼した。また、調査用紙を留め置き法で回収するために、調査用紙の回収袋を病棟内に設置した。

調査対象者には調査用紙記入後に小袋に入れて厳封し、回収袋に入れてもらい、その回収袋を研究者が回収した。

5. 分析方法

統計ソフト SPSS バージョン 22 を使用した。基本的属性について集計後、看護基礎教育課程別に ESCQ の全体の得点と 3 つの下位尺度別の得点を分散分析した。

6. 倫理的配慮

本研究への参加は任意であり、調査用紙は個人が特定されないように無記名とし、得られたデータは研究目的以外では使用しないこと、また、本研究は、S 大学医学部医倫理委員会で審議の上、医学部長の承認を得ていること等を口頭と文書にて説明した。（承認番号 3613）

C. 結果

1. 736 通の内 506 通が（回収率 68.75%）回収され、467 通を分析対象とした。
2. 4 年制大学卒業の看護師（以下、4 年制大学）は 20 歳代が多く、3 年制短期大学卒業の看護師（以下、3 年制短期大学）と 3 年制専門学校卒業の看護師（以下、3 年制専門学校）は、30～50 歳代が約 8 割を占めていた。看護基礎教育課程別で ESCQ 全体の得点について一元配置分散分析をした結果、有意差が見られ、多重比較の結果、3 年制短期大学が 4 年制大学や 3 年看護専門学校よりも有意に高かった。下位

尺度別に一元配置分散分析をした結果は、「情緒の表現と命名」と「情緒の制御と調整」に有意差が見られ、多重比較の結果、「情緒の表現と命名」については3年制短期大学が4年制大学や3年制看護専門学校よりも有意に高く、「情緒の制御と調整」についても3年制短期大学が4年制大学よりも有意に高かった。

D. 考察

「情緒の表現と命名」は、自己の情緒を理解・表現する能力であり、「情緒の制御と調整」は、情緒をコントロールする能力である。今回、30歳代以上の看護師の経験年数は5年以上と推察される。金子ら⁴⁾は、経験年数が3年未満よりも6年以上の看護師の方が、自己の情動の表現ができることを明らかにしている。中島⁵⁾らは、看護師は患者へのケアから得られる患者の反応を認識して、自己の看護ケアのフィードバックを行い、それを看護チーム内で表現し共有することで情動知能を高めると述べている。30～50歳代の3年制短期大学卒業の看護師は、長年、同僚やコ・メディカルとともに働きながら、自分自身で看護ケアのフィードバックを行い、そのような関わりの中で、自己の思考や感情を表現し、感情もコントロールしながら看護を実施してきたことで、情動知能が高まったのではないかと考えられた。

しかし、同じ3年制であるにもかかわらず、3年生短期大学が3年生専門学校よりも有意に高かった。このことは、看護専門学校と短期大学の教育的な位置付けの違いが関連すると思われた。大学は専門知識および技術を教授すると同時に研究も行い、専門学校は看護師に必要な専門知識及び技術を教授することに主目的がおかれ、短期大学はその中間的位置付けであると考えられる。大学はもちろんだが、短期大学においても、その教育内容の多様性から、自己の感情や情緒を理解・表現・コントロールする能力をより培うことができ、情動知能が高まったのではないかと考えられた。

また、情動知能とは、小松ら⁶⁾も言うように、「自分自身や他者の情動を認識したり、表出したり、また理解したり、コントロールしたりする知能・能力」である。橋本⁷⁾は、「看護師の年齢が高いほど、看護における社会的スキルも高くなる傾向があることが明らかになった。本来持っている能力に加え、看護行為に携わる経験年数の長さ、臨床看護実践で得られた豊富な体験が看護職の一定の能力を高める。臨床看護師は、人と人とのかわりを基盤とした対人関係スキルなど、看護における社会的スキルを発展させる。」と述べている。今回の結果から、3年生制短期大学や3年生専門学校よりも情動知能の得点が低かった20歳代の4年制大学卒業の看護師は、いまだ自分自身や他者の情動を認識、理解、コントロールするスキルや、対人関

係を円滑にする社会的スキルに長けていないのではなかも考えられた。

佐藤⁸⁾は、「新卒看護師は先輩看護師を役割モデルとして、存在や行動そのものを見て経験を積み重ね、看護の知識・技術ばかりではなく、行動の観察を通じて、周囲のスタッフや患者・家族を含めた他者との接し方、組織や仕事の価値観、行動様式を学習する。」と述べている。臨床において、40歳代や50歳の経験豊富な先輩看護師が、20歳の若い看護師に対して、自らの言動を示し、自らの経験を踏まえた指導や助言をするなど積極的に関わってコミュニケーションを取り、サポートを繰り返すことで、ゴールマン¹⁾がいう「他人の気持ちを感じ取る共感能力、集団の中で調和を保ち、協力し合う社会的能力」である情動知能が発達・向上すると考えられた。

E. まとめ

情動知能を高め、より質の高い看護実践を実施していくためには、自己の感情や情緒を理解・表現・コントロールする能力や対人関係スキルを培い、そして、臨床経験豊富な看護師が、自らの経験を踏まえた指導や助言をもとに積極的に関わり、サポートを繰り返す教育の必要性が示唆された。

F. 利益相反 利益相反なし。

G. 文献

- 1) ダニエル・ゴールマン：EQこころの指数，講談社，453，2015.
- 2) 井村香積他：看護師と患者関係に基づく看護師の目標達成行動に関連する情動知能—看護師と看護学生の比較—，三重看護学誌，第14巻，81-89，2012.
- 3) 豊田弘司 他：日本版ESCQの開発，奈良教育大学紀要，第54巻，第1号，43-47，2005.
- 4) 金子直美他：看護師の情動知能における経験年数群の比較—情動知能から継続教育を考える—日本看護科学学会学術集会講演集，422，2013.
- 5) 中島正世他：看護の充実感や職場のソーシャルサポートと看護師の情動知能との関連，横浜創英大学研究論集，第1巻，14-22，2014.
- 6) 小松佐穂子・箱田裕司：情動性知能に関する研究の動向，九州大学心理学研究，第12巻，25-32，2011.
- 7) 橋本結花：臨床看護師の看護における社会的スキルの関係—年齢からみた看護における社会的スキルの実態—，高知大学学術研究報告，医学・看護編，第56巻，9-19，2007.
- 8) 佐藤真由美：新卒看護師の成長を促進する関わり，日本看護管理会誌，vol.14 (2)，30-38，2010.